

甦れ！古代ロマン復元住居再生事業

宮崎県立西都原考古博物館

田中 敏雄

目次

一 はじめに

二 古代復元住居再生事業について

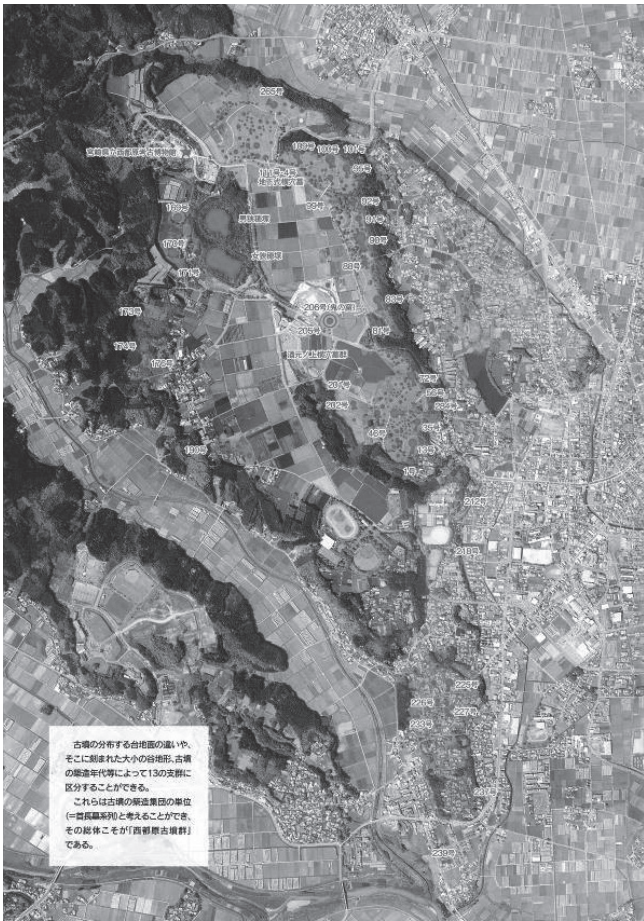
三 事業の実際

四 おわりに

一 はじめに

宮崎県立西都原考古博物館は、九州の東南にある宮崎県西都市に所在する。

西都原古墳群は、日本最大の帆立貝形古墳である男狭穂塚（おさほづか）、九州最大の前方後円墳である女狭穂塚（めさほづか）（男狭穂塚・女狭穂塚はともに宮内庁によって陵墓参考地に治定されている）をはじめ、三世紀末から七世紀前半にかけて築造された大小の前方後円墳・円墳・方墳等三〇〇基以上と横穴墓・地下式横穴墓で構成される、日本を代表する古墳群である。この古墳群の一角に位置している宮崎県立西都原考古博物館は、特別史跡西都原古墳群に臨むサイトミュージアム（Site Museum）であり、豊かな自然と優れた歴史的文化的景観を包括したフィールドミュージアム（Field Museum）である。



西都原古墳群全景

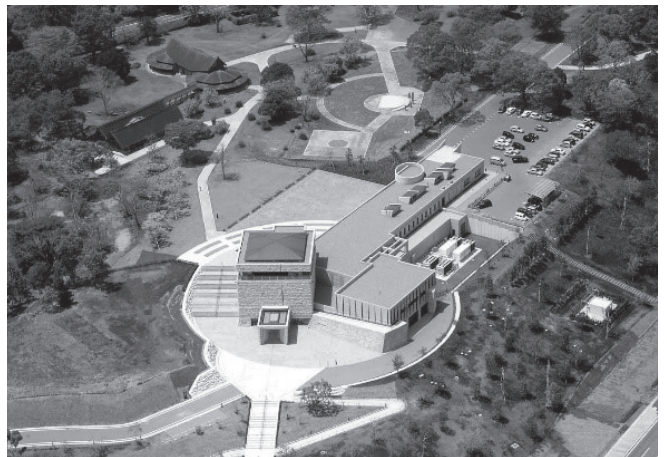
また、博物館の構成施設である古代生活体験館は、西都原考古博物館に先行して一九九七年に設置された。古代人の生活を実体験することを通して、「自然との共存」「古代人の知恵と工夫」を学ぶとともに、「文化財を大切にする心情や態度」を培うことを目的としている。

古代人の暮らしを体験的に学ぶためのメニューは、粘土を用いた土器・埴輪・土鈴・土笛づくり、滑石を加工する勾玉づくり、竹笛づくり、頁岩を用いた石器づくり、弓錐式の火起こし、アンギン（編物）でのコースターづくり、ガラスを熱して加工する蜻蛉玉づくりなどを準備している。

西都原考古博物館の一角に位置する古代復元住居は、一九九六年から開始された「史跡等環境整備計画（風土記の丘整備事業）」によって、博物館の前身である旧西都原資料館の付属施設として設置

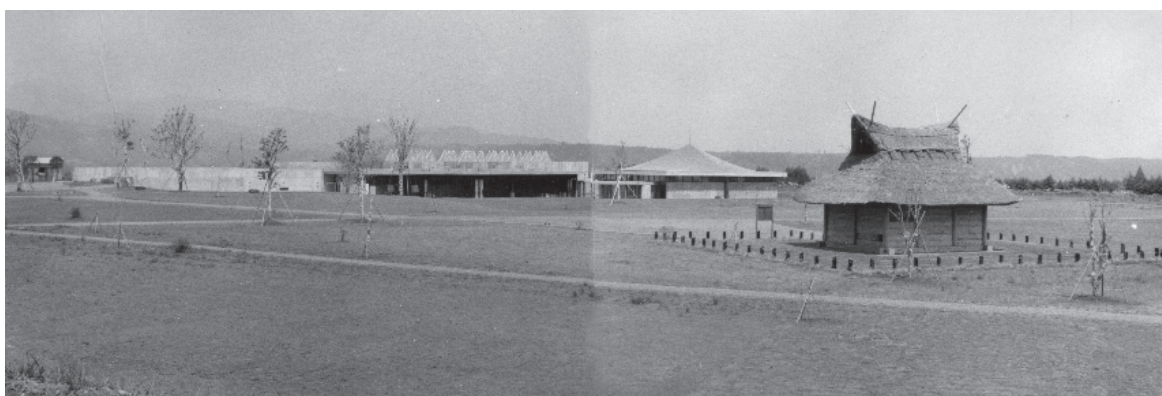


古代生活体験館



西都原考古博物館

されたものである。この風土記の丘整備事業は、歴史的景観の創出を目的としたものであり、古代復元住居もまさに景観の一部として定着している。



建設当時の様子

この家屋は、古墳時代の平地住居である。復元は、当時の東京国立文化財研究所長関野克氏の設計指導によるもので、五世紀ころの家屋文鏡や埴輪を参考にし、建築された。

単に外形だけでなく、建築技術も当時のものを復元するように努めていることから、古墳時代の家屋を知るうえで貴重な資料となっている。

古墳時代の家屋としては、このほかに高床住居、高床倉庫、竪穴住居などがある。屋根はこの家屋の入母屋造のほかに切妻造や寄棟造などがある。

二 古代復元住居再生事業について

(一) 事業概要

古代復元住居は、設置から半世紀近い年月が経過し、茅葺き屋根の劣化が著しく、改修が必要な状態となっていた。この改修作業を専門業者に委託するのではなく、地域在住の技術の継承者の協力を得て、県民参加型のイベントとして二年をかけて古代復元住居の改修を行った。また、資材の確保から改修までの各工程は、文化と技術の継承のため詳細に記録を残した。

事業初年度（二〇一五年度）は、改修に向けて必要な材料の準備期間とし、二〇一六年度は、確保した改修資材を用いて屋根の葺き替えを行った。

(二) 屋根の葺き替え工事

古代復元住居は、一九九六年の建設以来三回の屋根の葺き替え工事を行ってきた。これは、全て宮崎県内の専門業者による工事である。



2回目の葺き替え（1986年2月）
上：改修前 下：改修後

1回目の葺き替え（1974年12月）
宮崎日日新聞（1974年12月5日付）より



改修前の状況（2015年4月）

3回目の葺き替え（1997年4月）
古代生活体験館建設のための移設時

三 事業の実際

(一) 二〇一五年度(全六回)

第一回 二〇一五年七月二十六日(日)

「オリエンテーション」

最初のオリエンテーションを実施した。参加者は四十五名のうち二十七名。今後の日程や活動内容、服装などについての説明と古代復元住居の現況見学を行った。



ボランティア参加者27名(2015年4月)

第二回 二〇一五年八月九日(日)
「ヒノキの伐採、樹皮剥がし」

西都市銀鏡のヒノキ林において、伐採したヒノキの樹皮を剥がす作業を行った。木を削って作った専用の工具を用いて、樹皮を少しめくり、そこから手で剥がしていく。昼食は、猟師が動物に遭遇した際にすぐに行動できるよう立ったまま片手でも食べられる「狩人飯(かりんどめし)」を食べた。最終的には、約40本のヒノキの樹皮を剥がした。作業の最後には、指導者の方たちが、古くからの地に伝わる「木おろし歌」を披露した。静かな林の中に響く歌声が感動的であった。



斜面地でのヒノキ樹皮剥ぎ作業



狩人飯(かりんどめし)

第三回 二〇一五年十月十一日（日）

「茅場見学、茅縛り体験」

屋根を葺くためには、大量の茅を確保する必要がある。西都市と西米良村の境にある烏帽子岳の茅を使うため、茅場の見学と蔓を使った茅縛りの体験を行った。



蔓で茅を縛る作業



登山道を歩いて茅場へ向かう

第五回 二〇一五年十二月六日（日）

「銀鏡神楽見学」

茅刈り作業の予定で集合したが、前日からの雨のため茅場の状況が悪く、作業は中止とした。そのため、毎年十二月十四日に銀鏡神社で奉納される国の重要無形文化財である「銀鏡神楽」の通し稽古を見学した。

銀鏡神楽についての概要説明を聞いた後、神楽殿に移動して稽古を見学した。普段は目にするのできない貴重な体験となった。

第六回 二〇一六年二月七日（日）

「茅の移動・収納」



茅の積み込み作業



茅の搬入作業

第四回 二〇一五年十一月十五日（日）

『講座「古代住居を学ぼう」』

当館学芸員が、画像や模型などを用いて、これまでの発掘事例を紹介し、人間の住処・住まいについて学んだ。その後、古代復元住居の現況確認をした。

十二月中に刈った茅は、一か月以上その場で乾燥させていた。茅を茅場から運び出し、大型トラック一台、軽トラック二台に積み込み、改修前の古代復元住居に収納した。

(二) 二〇一六年度 (全六回)

第一回 二〇一六年七月十七日 (日)
「説明会、竹の伐採」

二〇一六年度の活動内容を確認するため、説明会を行った。屋根の骨組みの材料となる竹を伐採し、古代復元住居横に搬入した。

第二回 二〇一六年八月二十一日 (日)
「安全祈願、屋根の解体」

屋根の改修作業の安全祈願のため、神事を執り行った。その後、前年度から住居内に保管していた茅を移動させ、屋根の古茅を全て取り除く作業を行った。作業には、考古博物館少年団の団員も加わった。最終的に、屋根の骨組み解体まで行った。



屋根解体作業



神事 (安全祈願)



屋根の解体完了

第三回 二〇一六年八月二十七日（土）
「屋根の組立て」

昨年度伐採し、樹皮をはがした木材（ヒノキ）を屋根に上げる作業をした。参加者は、高所での作業は危険なため、解体した木材の整理や釘抜き等を行った。さらにこの木材を使って、簡単な椅子やテーブルを製作した。



縄による組立て作業



竹の骨組み（横方向）



ヒノキの骨組み（縦方向）

第四回 二〇一六年九月十日（土）
「茅葺き作業①」

茅葺きの基準となる四隅の茅（シユギ）の一段目の取り付けから開始した。シユギの取り付け後、平側と妻側の四つの面に対し、軒となる下側から順に茅束を縛り付けていく。一つの面に一段ごとに茅束を取り付けた後、上から竹で押さえ、骨組みに縛り付けて葺きあげていく。二段目まで葺きあげた時点で、昨年度に用意した茅を全て使い切ったため、再度、冬場に茅刈りを行ってから、作業の続きを行うこととした。

第五回 二〇一七年二月二日（木）～三月一日（水）

「茅葺き作業②」

十二月に新しく刈った茅を搬入し、茅葺き作業の続きを行った。実働日数十二日間、指導者を中心に、延べ六十人の作業となった。（茅葺き作業の工程については後述する。）

第六回 二〇一七年三月十一日（土）

「落成式」

古代復元住居の落成式を実施した。無事に完成したことを祝う神事やせんぐまき（餅まき）を行った。改修作業の参加者も数多く参列し、完成を祝った。



神事（完成祝い）



せんぐまき（餅まき）

（三）茅葺き作業の工程

① シュギ（基準となる四隅のこと）に使う茅の束。直径三〇cmほどの束を四束縛り、それらを三つ組み合わせる。

② ①の茅束をシュギに縄で縛り付け、さらに青竹で押さえつけて固定する。

③ シュギの取り付け後、平側と妻側の四面に茅束を骨組みの竹や木に縛り付けていく。縄は、使いやすいように巻きなおして腰にぶら下げておく。

④ 茅束や押えの竹を骨組みに縛り付けるときは、内側から竹の「ハ

リ」を使って、縄を通していく。内側と外側の人との連携作業である。内側の人のことは「ハリを持つ人」ということで「はつどん」と呼ばれる。

⑤ 各面の一段ごとに茅束を縛り付けた後に、その上から丸太で茅を押さえていく。これが、足場にもなり、上の段の作業をする際の基準線にもなる。

⑥ 縛り付けた茅束をさらに押し込み、整えるために、「シャヅチ」という道具で叩く。

⑦ 一番上の棟木まで茅束を被せた後、茅を押さえるために、太めの丸太をのせて固定する。

⑧ 仕上げに、茅を刈りそろえる。上から順に刈りそろえ、足場の丸太を外しながら下りていく。



③



①



④



②



⑦



⑤



⑧



⑥

四 おわりに

茅葺き屋根という日本古来の文化と技術の一部をボランティアとして参加していただいた県民の皆様と学ぶことができました。今後、も葺き替えをした屋根を少しでも長持ちさせるため、「火入れ」を継続し、できるだけ良い状態で公開展示できるようにしていきます。

この事業は、東米良匠の会の皆さんのご協力無くしては実施できませんでした。最後にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。



指導者（東米良匠の会）